

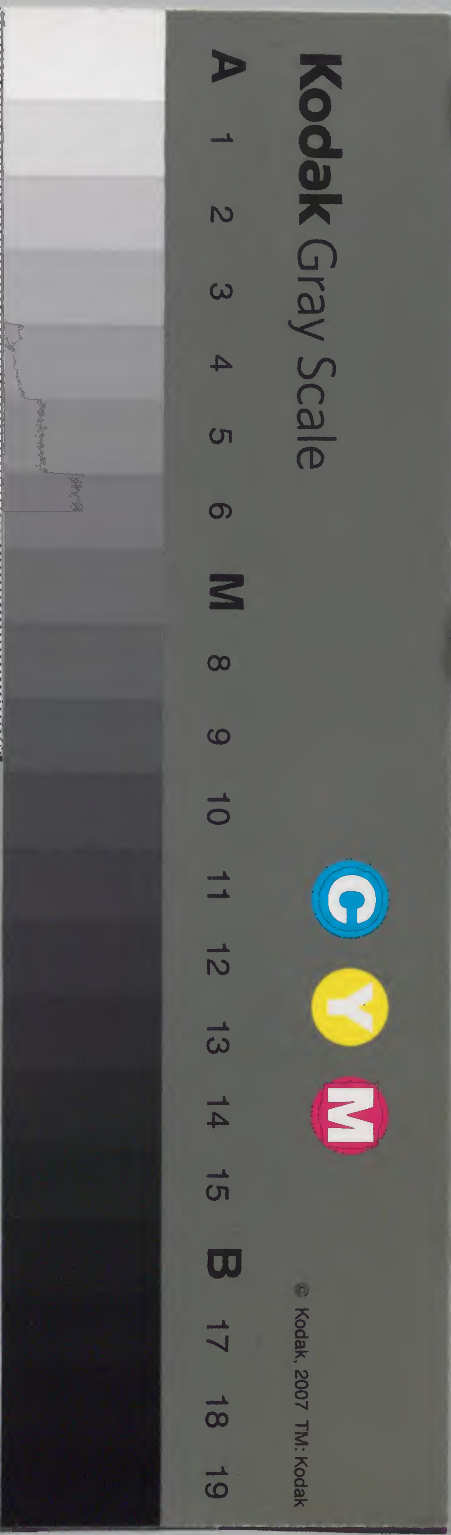
伊勢參宮名所圖會

内閣文庫 和書 共
 内閣文庫 和書 共
 八三三
 三函 三冊 架
 類 號 冊

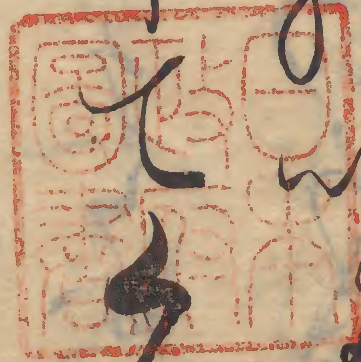
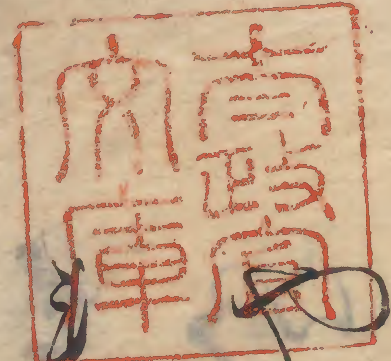
和書門
 八六六二
 九二二
 六八二
 冊架函號類

内閣文庫	
番號和	8662
冊數	6 (1)
函號	172 320

172-320



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり



Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), arranged in vertical columns from right to left. The text includes characters such as 'の' (possessive particle), '字' (character), and '比' (comparison).

音慈文庫



とぬいしはくみ
しるはるるま
とく免てきか
如くまふ津も人
老けくまふ

序二

草く月にか
利法く伊勢
乃名もあま
くはくまふ
とくまふ

寛政のまゝ
はるかに
はるかに
はるかに
はるかに
はるかに
はるかに

序ノ三

寛政のまゝ
はるかに
はるかに
はるかに
はるかに
はるかに
はるかに

諸羽明神

袖川原

走井

近江國滋賀郡

関清水

逢坂ゆいほげき

関寺

大津里

打出溪

同精神故事

義仲塚

膳所熱門

膳所城 兼五橋舟

十禅寺

どうろん茶屋

兩國寺

輝丸祠

関小川

関大明神輝丸

長安寺

八丁れの辻

四宮明神

りうこ川

芭蕉堂

天満宮

膳所の猿

巡地蔵

小国城

逢坂山

関守神

立圓観音

牛の塔

小町庵

同祭祀引山

石場 兼板迎

同塚

八大龍王社

信膳の溪

四宮川

追分

逢坂関旧蹟

駒迎

関清水輝丸宮

近松御坊

城跡

松幸村蹴鞠社

義仲寺

この川馬場村別保

八大龍神社

粟津原 兼合戦

兼平寺

八幡社

鳥井川御霊社

椋谷堂 兼瀧

源頼朝石塔

曆海尻掛石

田畠社

五百羅漢

芭蕉幻住庵旧蹟

石山寺 兼住持法堂

同乳母亀岩石塔

悪源右義平塚

蜻蛉の池

守子川

何々の薬師

源氏の間七輪

庁履園

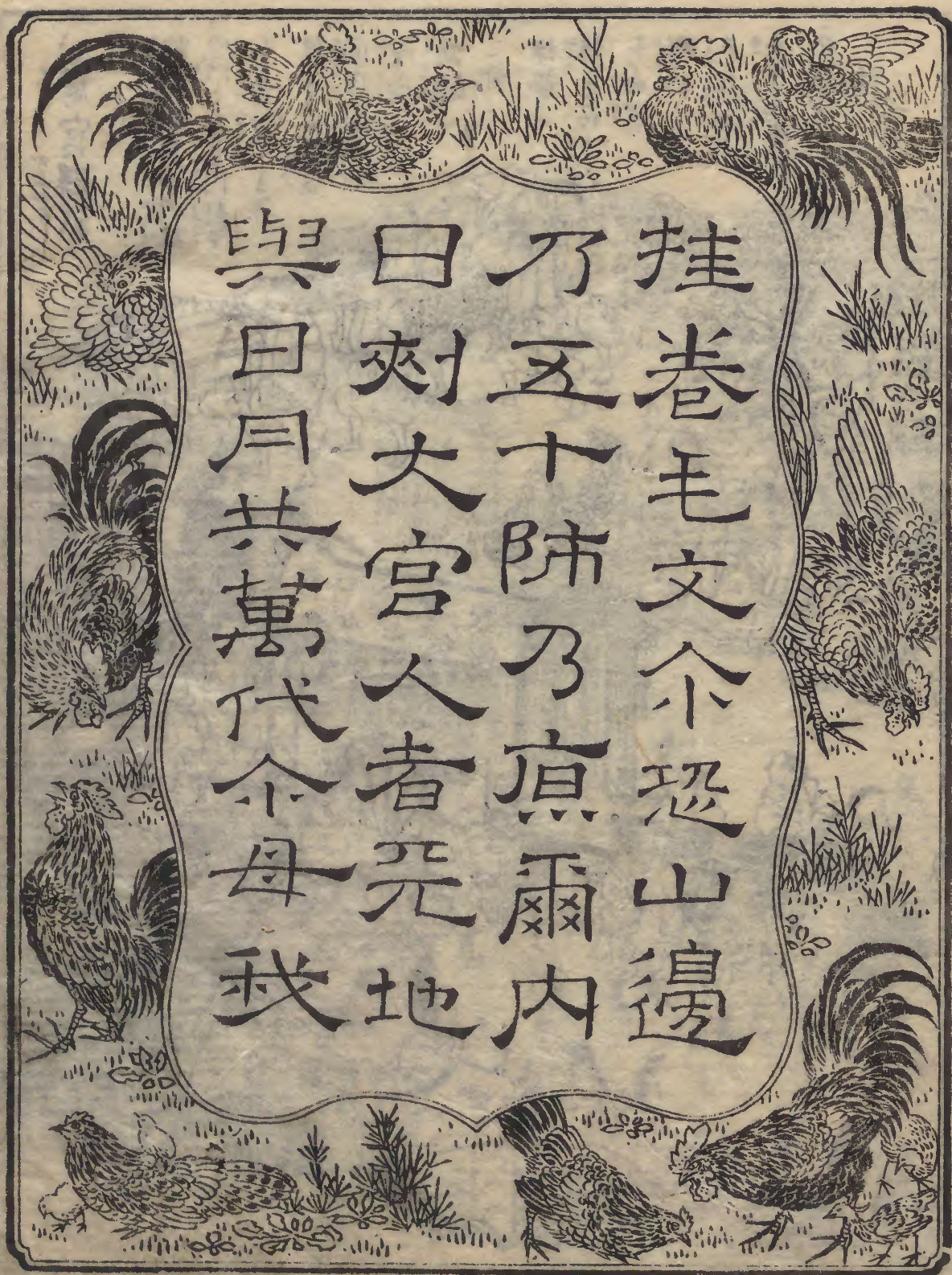
魁塚

兼平塚

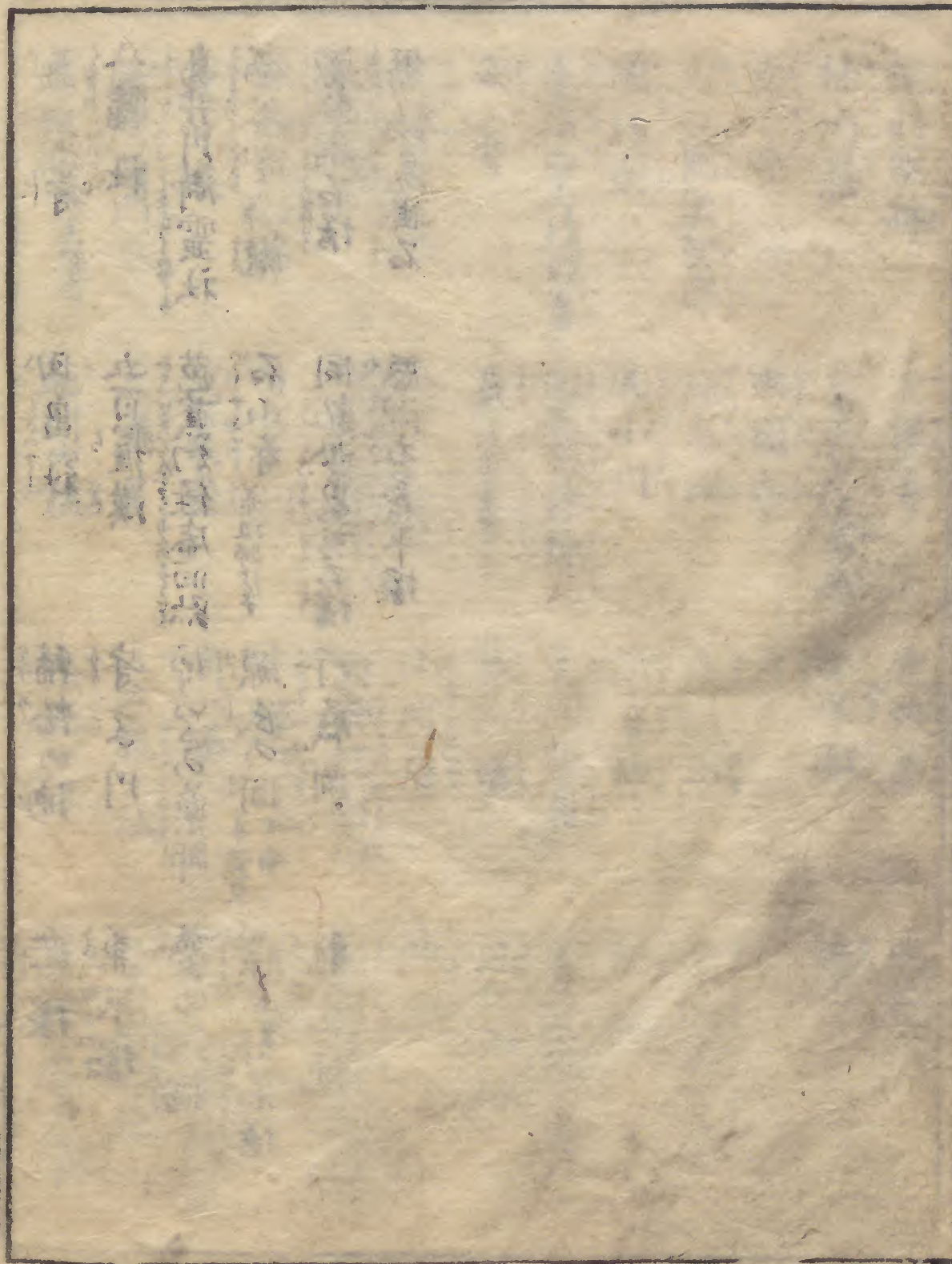
夢の渡橋

紫式部石塔

龍穴池



挂卷毛文介恐山邊
乃五十疋乃煎爾內
日夾大宮人者禿地
與日月共萬代介母我



齋宮群仍

首大津宮の御杖
の代りて内親
を齋宮よせ



終ふよ三舞の
間内裏及び
肘宮
活役
こ都
伊勢
を各宮
群仍
其國
あり此書
の流
益と
又も

一ノ三

尚幸宴
下の齋宮村
の糸に素曲
記



三條橋
さんじょうのしり



京三條橋

左岡秀吉公 増田長盛又奉約せり此の石也東海

道五十三驛これよりとて橋の石柱の遺筋

とと長サ二十七丈餘極實珠と銘あり

盛衰記に巴東東下向の村に義仲白川の末流に引多る

小勢渠より三條小川へ引退く石又中三條段にむと

白川橋は川りといひ白川村を南へ斜に今の南禅寺まで流

まがらて加茂川へ入今の檀王其所の落合にして今檀王の裏

一間餘の堀のまがらぬあり是元白川筋の筋なり今の白川橋

を町餘西の方に交流あり南へ交流する川筋は是と小川と

とい別なり今の知恩院町を迂通る大和橋の下へ落る流

盛御小川の山莊といひ知恩院町の東にありしるらん本曾殿三

△おれよりと科まをの都新に譲りて安んじたりを指し

其のぶぐととろれをいふて不とを國もとを渡りし補ふ

増田の三奉約の一人たり西条五本の

橋のより左禅記に記えり

本曾とてはゆり川を浦で射合しり本曾を僅に二三

の勢とてはゆり本曾とてはゆり川筋より一の廣

檀王法林寺△

今檀王の裏に中三條段にむと

今檀王の裏に中三條段にむと

今檀王の裏に中三條段にむと

今檀王の裏に中三條段にむと

今檀王の裏に中三條段にむと

条小川は退くといひ此小川を今古川町と名不其あとなりそ

形のりて溝の大なる流なり

粟田に此流の換名あり上粟田

青蓮院 京極大僧師實公の御子行玄大僧正用基也當院筆道

の免許あり是を本道といふ筆法は尊圓親王を御祖として御代々

書跡相續ひく高逸は御書風を御家流と稱と

門出蛭子神明社 舊地の聖護院の本林の小あり空上の後三條通粟

田領にうはし其後青蓮院御境内庚申堂の傍に後と

の旧地を今 大い半若丸奥加下向の門出に願と掛り

金藏寺米地藏。庚申堂。大師堂。辨財天。尊勝院

十禅師の神祠 青蓮院境内にあり

古書に十禅師の

古書に十禅師の

古書に十禅師の

古書に十禅師の

白川橋





益の栗田
 御殿へ入候
 白川橋と誠
 水際を智恩
 橋へより此橋
 の上にて稔の
 曲お工めとそと
 其路瓜とては
 祭おびさし
 きり國のねり
 夜寅の刻り



栗田口天王祭
 毎歳九月十五日昼夜二夜
 の渡御あり神輿あり
 此の神をんて振置たり其
 余氏の所よりも神敷まお
 連て踏へ其飾りあり
 て員藤
 あり

栗田口十禅師
 過の故

著聞集云
 一條院の時河津松尾
 の僧あり多るめんく
 とうひいれむんて
 をりたごりたれを
 獲て栗田口十
 禅師の辻際
 きて自ら
 人の云ゆを
 ばすそ人と
 好られり多
 にひされ下
 み海等々
 るよ人馬か
 をりて此僧を見て
 云わんは送物之他未
 名いれむんて



ア
 ヒ

持あり初此人いりて
 名いせたるに南殿の池
 に魚集り浮
 ひりり多
 ちりりしが
 あはせて大か
 輕をりり
 多るまか
 ちりり多
 帝其友
 と同た
 さいはる白
 此身をも
 とさし後の
 僧と父母のち
 ちして後
 義と侍りのいり
 世に厭感ありて佐
 園に回園を揚り
 松接を新しんたり





ひのとがまはげ
日園嶺

續古今

たしなみの

とく乃

まれば

狩くま

入日の

園山

まごも

かろ

あり

土御門院



天智天皇廟陵
即沖瀬地と云

ア
十

安祥寺

伊勢物語
 田村の帝と
 中とこかとおい
 まーく其時の女
 御たうきこゆヤ
 こまそろうろろれ
 矢張りく安祥寺
 にてみまこーろろ
 さげもの奉まろ
 ねてまろりあはれ
 もの女捧げむろ
 ありそこぢくろ
 さげものをま
 の枝又付て堂
 け着よまろれ
 がらもまろり



堂の茶み
 効き物ろ
 中うよろん
 じんろろ中略
 くのの
 題めてまの心ま
 ある秋奉らせあふ
 右のいまの
 かんろろかき
 なめたれがひ
 ぐろろろろ
 くのの
 うろろて
 あろろろ
 まのま
 かんろろ



右田村帝の文徳天皇の
 むまのろろい葉葉のろ



君や
そで
へん



四の宮村
四の宮川
巡地蔵

やぶ入
乃
あふみの

未
を
珍



此不東園
 大津
 退分
 此不東園
 大津
 退分
 此不東園
 大津
 退分



大津
 退分

走井



此餅や
のた
某乃
物好
てを
造徳
云書
出景
中會
云符
せう
毎舟
和山
おく
た

世系

山仔の亭

藻山



て今
其形
洗せ
高本
其余
小亭
心け
内小
の像
おさ
石の
小堂
兼師
石佛



逢坂山

一名白向山

手向といひく徑背
旅行人まらば山の
巖そ緒裁いらく
の紙とぬこりて
口方へらしし足
非へ白向しと
其手向け
山よめたる
都より出て
まがじり
必此不
白向山の名も



ありねみねを今夕フ
がとらるる則たむけの
傳諸ありり説

後撰集 亥四

名山

名山

名山

名山

名山





関大明神
輝丸宮

事故

牽きつゝこれを遊坂の約迎と云ふ
牽きつゝ十七日五甲斐徳坂廿日武蔵小野廿三日信濃野月廿八日上野之尚園上之江を
 遊坂のゆつつける

あふさゆつつけるよりこそ表ゆきをさへくもる也 閑院
 ゆつげをくいの中さへがき付に境のなをさやけさきせ給ふと給ふゆ人をつけに方
 の園よりいさうをさへくもる遊坂と云一方の園をさばかくより又
 大和の遊坂

龍田も大和界の園なりと云を遊坂と云ふなりと云ふは〇に方の園に東の遊坂に有乳
 南の遊田西の遊生なり
 関大明神輝丸宮 此丸のやへに稀と云ふ此の中より八丁の間に関清の明神と云
 此丸に日又此社へ還神あり是神より之の宮を神祇所とも云ふなり
 立聞観音 此宮は蓮如上人の寄寄石あり庵は長老院及の款あり輝丸の屋敷をさへく

関清の輝丸宮 此宮首の園寺明神と云ふ今も三耳寺別所の内近松寺中と云り

拜殿の柱は表へて云 関清水輝丸宮醍醐天皇弟四皇子日本國中説經讚語
 勸化師者曲藝者等祖神也右等之者之免狀當本社出之也 関清水涌出
 源在本社拜殿之前 〇小野小町姿見石在本社左
 〇小野庵室在本社少北西云

祭後の日輝丸蜀紅錦の御衣何く不持の長刀金装模刀是等を

逢坂駒迎

拾遺
あふさの國の逢坂

ひくらし
今や
石月の駒貫之

逢坂のせいの

あふさの國の逢坂
ひくらし
今や
石月の駒貫之

大田の逢坂

牧の馬を奉る

走動の駒貫之

月と八つ春に
逢坂の逢坂



院の御園忌

あふさの國の逢坂

六日

南殿

を御後

文

早

をたま

つ

み

取

院

東宮

久

ま





その初より後漸く其先驅のおとて國々の説教流の者黒き
 塗板み其國郡姓名氏記して掲げ給はれを説教者の札と
 不接する此説教流をいふ今この彼儀の如き者にてそと
 か中世より多く音曲の節とつけし平家流の如き其曲節今
 るの中へ入る憂若のあつれを催しし曲あり。又此流の
 非佛教人をまはつる其者流の如きつらうかの空文より
 今三強を繋ぎたること。又説教流へ必きなる河原を湯杖と
 ありしを

○彈丸の延喜帝年記の皇子方りとい源の親幼東國記にもさ
 其説のさとして書くにもを論じて異説あり。又今昔物語に
 ぼ敷實親王の雜式といふりるふえり。姓氏もいふれ此説
 一。又今昔物語は博雅三條といふ人多く本懐といふの
 色いおひよりいふ。此を盲人混して彈丸も盲人といひ
 彈丸を盲人といふ。後撰集これやこれなり。今もいふ
 ゆりの人をいふ。今もいふ。即丸といふ記を
 水戸學士の一説あり。先又信ど。即丸といふ記を
 ○唐南朝元帝の諱を延基といふ。延基の三男。禪淵の
 を相國といふ。不に禪丸といふ。禪丸といふ。今もいふ。禪丸
 仍名付。今もいふ。日本の彈丸の。今もいふ。延基といふ。今もいふ。禪丸

彈丸

後撰集雜之

相國の國
 に菴室

を地きて
 仍るふ人と
 名と

これやこれ
 まう後つ
 志れも
 あふさ
 うの國





閑寺小所
 閑寺小所の松を教皇秘中の
 の秘めにして其人の
 あらざればなること
 ようく道安雲
 上礼奉會真
 にも阿摩
 幸は



園寺 牛佛

東瓦物活火の月の巻を壽二多五月、
 日 田にきけい 慈徳のあまの園寺と云
 牛佛のあまの園寺と云
 堂を建慈徳を佛と云なり
 えもいふ大木も唯け牛一ツとして
 こいひつるのそとに中略寺にお
 かりに徑いん此牛のりて日
 我らとて佛と云け寺の佛
 を佛と堂を建せんを
 ごととらふそをあれ人い
 うはうふたれと云ふなり中略
 つふふふふふふふふふふ
 中略の牛の心をも佛と云
 のを佛と云ふなり世の中
 又おのりたる人なりこれなり
 く中略唯帝東宮宮と云
 又おのりたる人なりこれなり
 牛佛と云ふなり中略
 像を画人として急ぎ



ア九七

園寺 牛佛
 又おのりたる人なりこれなり
 く中略唯帝東宮宮と云
 又おのりたる人なりこれなり
 牛佛と云ふなり中略
 像を画人として急ぎ

人あまの園寺と云
 田にきけい 慈徳のあまの園寺と云
 牛佛のあまの園寺と云
 堂を建慈徳を佛と云なり
 えもいふ大木も唯け牛一ツとして
 こいひつるのそとに中略寺にお
 かりに徑いん此牛のりて日
 我らとて佛と云け寺の佛
 を佛と堂を建せんを
 ごととらふそをあれ人い
 うはうふたれと云ふなり中略
 つふふふふふふふふふふ
 中略の牛の心をも佛と云
 のを佛と云ふなり世の中
 又おのりたる人なりこれなり
 く中略唯帝東宮宮と云
 又おのりたる人なりこれなり
 牛佛と云ふなり中略
 像を画人として急ぎ





大津八丁
札之辻

子観の馬も
せりや
くれ

其角

大津
四の宮祭引山

九月九日十日

西の宮 中津町
源氏山 中津町
折水山 中津町
西豆母 中津町
龍門 中津町
神樂 中津町
石橋 中津町
狸 中津町
西の宮 中津町
神功皇后 中津町
殺生石 中津町
郭巨 中津町
都合十四番 中津町
入飾 中津町
幕を張て 中津町
巧み 中津町
細 中津町



八九九

透物行い物

造花 中津町
獅 中津町
道祖神 中津町
御供 中津町
八月十六日 中津町
羊百石 中津町
御輿 中津町
九月七日 山飾
九月十六日 御輿洗





ノ三十

蹴鞠精神

若問集

侍従大納言成道の卿の
蹴鞠の心は心ざり深く
古今の妙もふてぞか
まゝなる或夜棚に置
石の鞠をにまらひ落
来りぬしあふは蹴の
ふてて手足身の様も
はく三四文の小児を
かゝる者三人はつ
鞠のやまらしては
うらみ河津を
と同珍ひまら
我の鞠の心
昔よりか
又鞠を落せ
落し入る
おしまさ



三十一

戸さのありて
縁のうらみ
眉まがかり
髪とや
まが一人顔
春陽花
のさ
又一人を
夏安林又一人を
秋園のさ
金とて君御鞠好ま
給ふ代に園榮(官増)
余さぐ後あらん御
の付はへく
おづらひを
はり御守り
とてわじ
あよりぬ
ことば



石場

旅より
る人と迎へ
て其を
を今酒迎
どいつとも
はるへんあん坂
まを出て
あふれが坂
とはいつへ
又玄日孝
皇后紀
壽下太子
按るホカ
て酒祝也
をとほの
は酒祝の
さるも



義仲の授意を以て絶好義経をとおして護りしむ義仲をせしめ治世を導く
我ひもこれと終りたりとて粟津の舟に於いて流矢をうけり自害して卒と是人の
よくある者なるは天皇の御心と

○芭蕉塚并に祠堂 本傳に當時其角去來をばり先の方の

門人足守を営む其後天明年中翁八十回の時を以て系圖傳撰夢

又改建る祠堂の内人形三十六人を書き各發をを書て堂内小

掛に翁の御遺一家の祖なり信姓松尾氏名ハ宗房忠孝と稱す

多に月嗣子死去と翁其死をうらみて我世思ふべきおみひたりて

子みゆりてを翁の遺教を看まうけてる辨又納め直り力を起す

後ハ海濱に居りて名成権者といふ二又の祖羅坊と号し延宝の末東武源川又

芭蕉社 かくして盟と雨をきく疾うな

苑の雲種も上野ウ回さくさく

と蝦虎の美奈をのびり源川ありてのりてこれよりあさくさく

隠さうのうらみを行 齊又ふくさう那

と風の吟び又終りては風の師と伝を傳其後らじうを地裏へちりたれば

病丁 かくかくりり押りてさひ採り那

其年より大津船の人のりり

てたより多あり元来混雑寺佛頂和尚み嗣法してりり

いこれ須戸の夜泊家深の住をたすゆららの庵も位つりり

なとつひく妙果の勢も十餘年の間杖と笠をたふす奥の細石の記

其後修験の故郷又庵をかまへ三月月の記ありて浪卷よ来りて

ふた門人ありり書をばさる令運をばりてそのまへ

族み病んで後ち枯野瓜うけまをり

本曾殿と資中合せのをさう那

右の晋子の枯尾をよつねをそこさう採りて其大むと記し

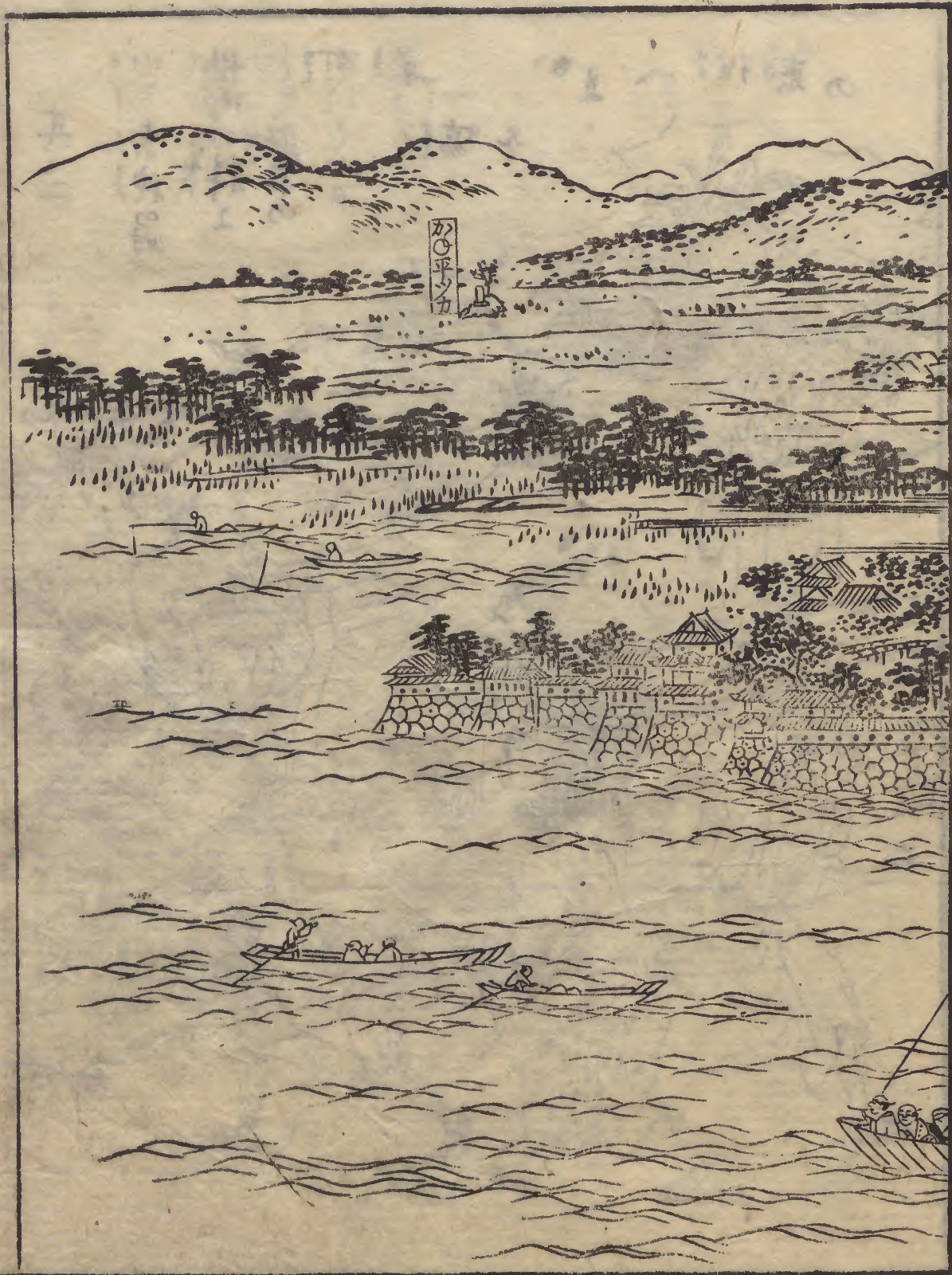
能登に六十余州の蒲播門人といふ二子ありり

をこして好人の誹謗と今諸國を營む芭蕉塚の教二百余基と

この川 ○馬場村 ○別保 國分寺本寺 ○昭新熱門

天満宮 此傍み北多和以来東武醫國宮吉田極源院法印常

八大龍王社 八の宮といふは九月朔日 ○八大龍神社



其二

山三祭後の附

供御の料よ

として膳所の

町にく七日

若より

一

を場

の素往へま



ア三十七

人よさ

せん

を

膳所の後と



栗沼合戦

あいつが
今井、四郎兼平の
後ろよりんで敗
み十騎を幸ひく
義仲よりく
あひ能れ
先鋒一系
四郎と通
ふと樹
是もも
仲討れ
ぬふ
その歌
石田彦
にゆて
曰これ
久東園の
この日



一の別者自
害とるを
いそかの後
をば又合ん
馬よりさうさ
まふ死を
つぬん
こ類
ろ

平家物語



梯谷堂

きこせとせ
水の勢田の橋
南の供所
まて九二十八冊
が其のあふ
飛ぶ十
衆星の光ま
を又取
水の上
舟ま
白
の後入日
九十八日
みり
小暑の
川
の



富士谷成章

う
くら
量
あ
谷
く



石山寺草創地
基平均時五尺
實鐸獲土中



とてし物とてあり

後日罪淺懺悔の爲に般若一部六百巻を

とてし物とてあり

後日罪淺懺悔の爲に般若一部六百巻を

或書云源氏物語の奥女子の口より唱ふる所のたれは又いふにやとていふは後日
 文孝の御書に於て其の御書に於ていふにやとていふは後日
 もの御書に於て其の御書に於ていふにやとていふは後日
 天竺一三秘の血脈を以て日本紀をよみしを以て日本紀の御書に
 ありしを以て石山寺の御書に於ていふにやとていふは後日
 の御書に於て其の御書に於ていふにやとていふは後日
 下へるといふは後日
 て石山寺の御書に於ていふにやとていふは後日
 竹の御書に於ていふにやとていふは後日
 しとていふは後日

其中に伊勢の奥を始に中院の江入楚に於て其の金さるる

紫式部石塔 紫式部は閑院大后冬嗣公の末裔就後守お時が

女之御書に於て其の御書に於ていふにやとていふは後日

源頼朝公石塔 源頼朝公の御書に於ていふにやとていふは後日

片履の園 片履の園の御書に於ていふにやとていふは後日

大師の御書に於ていふにやとていふは後日



石山寺前



一四三



石山寺



所名

以て聖教をまろせり瓜白の聖教といふ寺あり後祐の僧聖教人なり
此の寺は又瓜白を流せりなり瓜白の園といふ也一瓜白の聖教といふ
僧の説き語りなり

龍穴の池 本寺の西あり瓜白の池あり

曆海尻掛石 龍穴の池のそばあり昔曆海和尚といふ人此石の上より讀
む

弘法大師別墅の名号 ○式部自筆の大般若并硯石 ○淳祐白ひ

の聖教 皆寺にあり

都にも人やゆらん石との花よのころに杖の夜乃月 長能

瓜白の寺といふ説き語りて瓜白の石といふ寺あり

攝谷の瀧 今も瓜白の朝の百官の後處に即麻布の上の石を流すは其雨
山のりて今も休の妙物といふは瓜白の流

瓜白の寺といふ説き語りて瓜白の石といふ寺あり

悪源を義平が塚 本堂の西の中よりあり 義平は源義朝の嫡男なり十三歳
卒治の戦ひに異なり瓜白の寺あり瓜白の流と説き語りて瓜白の流

石のりて今も休の妙物といふは瓜白の流

瓜白の寺といふ説き語りて瓜白の石といふ寺あり

